



[令和 6 年 6 月 12 日 定例会発表要旨]

ヲタルナイ川について

小樽市総合博物館館長 石川 道章 氏

かつて「ヲタルナイ場所」の運上屋が置かれ、長く小樽と石狩の境界であった「ヲタルナイ川」。現在の新川河口付近であることはよく知られているが、この「ヲタルナイ」の研究については越崎宗一(1901-1977)氏の残した業績が大きい。

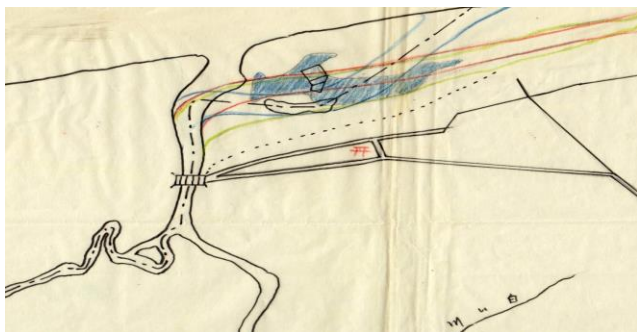
越崎氏は小樽で老舗の食品卸業「越崎商店」を経営の傍ら、地域史の研究で大きな成果を残され、特に北前船、アイヌ風俗画の研究では全国的にも先駆的な研究をされた方である。さらに、文化遺産の保存についても多大な貢献をされ、小樽市民にとっては「運河を守る会」の初代会長としても知られている。その越崎氏が、アイヌ語地名研究者の山田秀三氏と取り組んだ研究が「ヲタルナイの変遷」である。



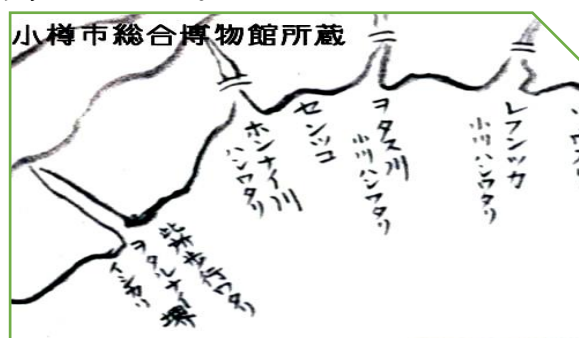
越崎氏逝去後、小樽市博物館(現 小樽市総合博物館)に寄贈された所蔵文献の中には、ヲタルナイ研究の草稿やメモが含まれている。

現在の新川河口の東側(石狩新港側)にある沼は、かつて「ヲタルナイ」の地名のもととなった、旧オタルナイ川の痕跡ではないか、といわれ、越崎氏は、現地調査はもちろん、様々な古地図からその地形変遷をさぐっている。

旧オタルナイ川河口付近は石狩砂丘の西端部分にあたり、砂丘列が海岸線に平行に何列か存在し、海にそそぐ川はその砂丘と砂丘の間を縫うように、蛇行しながら走っていた。現在も地形図からその痕跡を追うことができる。このような砂丘のような平坦面上の流路は、時折出水などにより海に向かい直線的にショートカットされ、旧流路の一部が取り残されることがある。石狩川周辺にある三日月湖もこのような要因で残されたものである。越崎氏はヲタルナイ川の流路の変化を考察され、文献に現れる「ヲタルナイ」の位置を考察されている。



河口取り合いの変位



寄贈されたヲタルナイ研究メモ

これは越崎文庫以外の資料、たとえば国土地理院の写真からもその変化が大きいことがうかがえ、現在残されている沼は昭和の時代に残された流路ということがわかる。

小樽市総合博物館などでも、なんどか現地周辺を踏査し、江戸時代の「ヲタルナイ運上屋」の痕跡を調査しているが、未だに確認できていない。おそらく、一連の激しい流路変化で、場所の所在地ごとと流失してしまったのではないかと考えている。

市立小樽図書館所蔵の地図からもそれがうかがえる。小樽周辺の川にはすべて橋が架かっているに対し、ヲタルナイ川だけが「歩行ワタリ」となっている点です。実は砂丘を走るオタルナイ川は水深が浅く、それゆえに常に蛇行しながら流路をかえていたのである。

さて、よく「ヲタルナイという地名ごと、新川河口付近から現在の堺町付近に移転した」と言われることがある。地点名としてのオタルナイは、江戸時代前期以降から移動していない。誤解される理由が「ヲタルナイ」は地点の名前のほかに、「地域」をさす名前としても使われていたことにある。江戸時代、現在の堺町からオタルナイ川までを「オタルナイ場所」と呼ばれ、江戸時代末期にはオタルナイ場所の「運上屋」が現在の境町郵便局付近、当時はクツタルウシと呼ばれた地点に移動し、このあたりがオタルナイの中心地となっていた。明治に入り、郡が設置されると、旧場所名から、堺町付近からヲタルナイ川までを「小樽郡」とし、クツタルウシという旧地名が使われなくなったことが誤解の原因と思われる。

現在、「ヲタルナイ川」河口までは徒歩でしか行けず、真夏は避けたほうがよろしいかと思われ、秋、涼しい時期の訪問をお勧めする



講演されている石川小樽総合博物館館長

* 8月例会 (8月14日 18時15分) 区民センター視聴覚室

研究部より、8月の定例会は茶話会を予定しています。お茶を頂きながら皆さんの話したい事、聞きたい事を紙に書いて出して頂き話し合いたいと思います。

今後の例会の運営方法の施策・会員のコミュニケーションの取り方 ・年配の会員に聞きたいこと・調べて見たいことなどをブレインストーミング方式で行いますので考察して来て。

手稲郷土史研究会 会報「郷土史ていね」第195号 令和6年7月10日発行

発行責任者：沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長） 編集：立花邦雄・川上義昭

♣006-0818 札幌市手稲区前田8条11丁目4-5 林俊一方 手稲郷土史研究会 *TEL 090-3381-4994

*FAX 011-682-9674 ♣メールアドレス teinenorekish@gmail.com 担当 菊池 博行